

『運命の人は、嫁の妹でした。2』BOOK☆WALKER限定書き下ろしショートストーリー



ニユートンの林檎

大吾クンは足がバキバキになってしまったので、入院することになりました。

（看病がんばるぞ！）

私——千子兔羽はむんずと息を吐いて、ぐつと身体に力を入れました。だつて私、彼のお嫁さんだもの。それに彼が足を悪くしてしまったのは、逗子に逃げた私を追いかけて、街中を全力ダッシュしたせいだ。ほんと馬鹿だなあ、とも思うけど、何故か気分は悪くない。

……悪くない。のだけれどね？

「おめーホント馬鹿だよなあ」

と、呆れ顔のイエン・シーハンさん。

「ギブスにらくがきしーちゃお♡」

と、うきうきで油性ペンを構えるリングイト・アカツキ・ホーエンハイムさん。

「やめろお！」

大吾クンは足を固定されて動けないので、リングイトさんにイタズラさせ放題です。イエンさんも当然のように参加し始めて、大吾クンのギブスは落書きだらけになる。

「こら」

それを諫めたのは、私の妹——いしいなでした。

「怪我人をいじめたらいけません」

「良いんデスヨ！ 大吾なんて年中怪我してるんデスし」

「（水の視線）」

「……と思ったけど、このぐらいにしといてあげよっカナー」

リンゲイトさんは絶対零度の目つきにぶるりと怯え、油性ペンを置くのでした。

「全くもう」

「ありがとう獅子乃ちゃん」

「良いんです。りんご食べますか？ 剥いてあげる」

「おいしいは感情の籠もっていない表情で呟いて、慣れた手付きでりんごの皮を剥き始める。

（うちの妹、良いお嫁さんすぎるだろ）

じゃなくて。そうじゃなくて。

（そこは私の立ち位置なのでわ？）

夫のために騒ぎを収め、隣でりんごを剥く。完璧に『妻』のムーブです。

「おいしいはつまんなそうに無表情でそれを行っているので、好き好んでやっているわけじゃないのでしょう。義理堅い彼女が当然の如く彼を氣遣っているだけ。とは言え――

「じ、おいしい！」

「なんですの、お姉さま？」

「りんごの皮むきは私に任せて！」

「おいしいは視力が悪くて黒板が見えづらい女子中学生のような目で私を見ます。」

「……お姉さまが？」

「なにさー！」

「ちよつと待ってください、プラスチックのナイフをもらってきます」

「い、妹のくせに姉を馬鹿にして！」

「妹らしく、姉の身を案じてるだけだから」

——大吾クンのお世話は、お嫁さんである私がしたい。

とは言え、いしいの言う通り私の手先は壊滅的です。美術の授業でも汎ゆるジャンルで下手つぴなので、『破壊衝動』とか『終わりの闇』とか抽象的なタイトルを付けて、下手くそな絵をさも狙い通りであるかのように演出しています。

「まあ良いけど、指を切らないで下さいね」

「よしきた！」

「……包丁を五寸釘みたいに持つのはやめなさい」

ちよつぴり間違えてしまった私です。早速、私はリンゴの表面に刃を滑らせる。

「うをおお……刃物こわあ……」

「と、兎羽。無理しなくていいからな？」

大吾クンが心配そうに見ている。私は親指を立てて笑いました。

「死なばもろとも」

「その覚悟で果物に挑むのは止めて」

むきむき。もたもた。

「できたあ！ はい、おまちどおだよ大吾クン」

「ありがとう兎羽！」

そして大吾クンは私の剥いたリンゴを食べるのです。状況は以下。

・酸化して黄色くなっている。

・皮を剥くと言うか削ったので表面ゴツゴツ。

・所々に皮が残ったまま。

「やっぱ、こんなの食べちゃ駄目だよ大吾クン」

「こらこら逃げるな逃げるな」

大吾クンは皿を下げようとした私の手を掴む（きゅん）。

「1つくれよ。ん……もぐもぐ。うまい」

「り、リンゴの皮むきなんて誰がやっても同じだから」

「兎羽がしてくれたから、美味しいよ」

なーんて、真っ直ぐ私の目を見つめながら言うわけ、こいつは。

「大吾キモい」

「大吾！ キモいヨ！」

「大吾さんキモいです」

友達&義妹の前で。凄いな私の夫。羞恥心死んでるのかな。

「たはは」

とは言え流石の彼も照れたみたいで、ちよつと笑ってた。

なんだ。くそ。可愛いな。そういう所が好きだぞ。くそう。

(そしてこの程度の褒められで顔真っ赤にして喜んでる私……)

ちよろすぎないか。わんちゃんか何かなのか、私は。ほかによ……。

「お姉さま？」

「ん、なに？」

「よかったね」

「うるさいよ」

ニヤニヤ笑う妹のもちもちほっぺを、私はむぎゅつと引っ張るのでした。

○

宇宙暦3721年。9月20日の事でした。

「あら、だいくん。珍しいですね、こんな所で」

私——千子獅子乃は地球連邦との会議を終えて、帰路についていました。

「しいちゃん」

運動がてらセントラルパークを歩いていると、白い息を吐くだいくんを見つける。

(寒いのかしら?)

ここはアメリカ連合のマンハッタン。古い歴史を持つ港町で、北アメリカの近くに位置する孤島です。経済規模は余り大きくない。ただどスペースシップの開発が盛んだった名残で、今でも私達レーサーの聖地なのです。

「見てくれよ、こいつ」

だいくんが指さした所には、ダンゴムシのような外皮を持った生き物がありました。大きさはバスケットボールぐらいでしょうか。一生懸命ちつちやな触手をうねうねすると、「カツカツカ」と摩擦音を出しています。

「あら。この人は」

「合成獣^{キメラ}のペットが逃げ出したのかな」

「こら」

私は彼のおでこに、ぺちんとデコピンかまします。

「いてっ。なんだよう」

「この人は、ねじまき座のココチュ星人の方ですわ」

「えっ!」

「知能点数が10以上なので、宇宙法により知的生物として扱う必要があります」

「なに言ってるか全然わからん」

「人類の知能点数が9.8点なので、私達より賢いです。ペット扱いは失礼」

——とは言え『知能』という概念は酷く曖昧なモノで、知的生命体であれば対等に扱わなければならないという宇宙法の原則には、批判も決して少なくありません。

「例えば人間が羊を家畜化したり、蜂の巣を燃焼しても虐殺とされないのは、この知能点数のおかげなのです」

「……蜂の巣を燃やして良いのは、当たり前だろ?」

「それは人類の作った常識に過ぎません。宇宙には多くの生物が繁栄して

います。例えば私達が他惑星の生物を研究対象にしたり、食べてみたりするためには、入念に知能点数を計測する必要があります。要は知能があるか否かで、私達の『仲間』なのか『資源』なのかを決めているわけですね。それが宇宙法の原則です」

「あー。そういや教科書で聞いたかも。人類が家畜化されずに銀河同盟の仲間になれたのは、文明レベルの割に知能が高かったからなんだっけ？」

とか、だいくんに常識のお勉強をしてあげたのですが（彼の前で知識を披露するのは、何だか良い気分でした）、今はそんな場合では無いのでした。

「このココチュ星人の方、ナノチップが破損したのかも。そのせいで、言葉が翻訳されずに困っているんだと思いますわ？」

「外星人って初めて見たぜ……」

私は屈んでココチュ星人と視線を合わせました。

（ん？ この人……）

目がありません。光の受容体が無いのかも。

私が自動翻訳アプリを起動すると、彼の触手が出す擦過音はイメージに変わりました。彼らは音で神経を直接刺激して、イメージで意思疎通を行う種族のようです。

『ハロー！ 地球人！』

※ここでは分かりやすく、文字で再解釈しています。

『こんにちは。ココチュ星人さん。私は千子獅子乃と申します』

『おー！ 名前！ それは個人主義的な種族の珍しい文化！』

『何かお困りですか？』

『エネルギーがありません。化石燃料、あるいは藻類バイオマス、魂魄流動体など、所有しているか？ プリーズ』

なるほど。どうやらこの人は、お腹がすいている様子です。

「じゃあ、Senaから燃料取ってくるよ」

「おねがい、だいくん」

彼はとてとと走って、近くのポータルへと向かいました。

『あなた達は、同僚ですか？』

ココチュ星人が、カチカチと音を出して尋ねます。

私はほんの少しだけ、何と答えるべきか悩んでから。

『私たちは、恋人です』

もうすぐ行われるレースで優勝したら、私たちは恋人になると決めます。もうすぐ、私は彼の物になる。それは未だに、私の中でふわふわとした変な重さを感じさせる。

（厳密には、未だ違うのですが）

ココチュ星人の外郭がざわざわと揺れました。驚いているのかしら？

『わお！ 有性生殖？』

『そうです。ですが私たちは異質です。人類はもう有性生殖を行うことはありません。しかし私たち2人はそれを選択しています。恋人という関係を選んでいきます』

『わーお！』

『野蛮だと思いませんか？』

私が尋ねると、ココチュ星人は少しだけ止まってから、すぐに答えました。

『——私たちは、賢くなりすぎました』

『？』

『私たち、生命は、沢山の物を手に入れた。宇宙のどこでも旅をすることが出来るようになった。不完全なタイムマシンも手に入れた。包み紙一つから数千の有機生命体を生み出すことも出来るようになった。代わりに私たちは失ってしまった。センス・オブ・ワンダーを』

難しい言葉だと思いました。『センス・オブ・ワンダー』。それは太古の時代でさえ、上手に日本語に翻訳出来る言葉では無かったようです。

「敢えて私が邦訳するのなら——『世界の魔法を信じる心』」。

『私たちは神さまよりも物知りになった代わりに、初めに努力という感情を失ってしまった。必要がなくなつたから。次に、冒険にワクワクする気持ちを失ってしまった。全てが既知になつたから。そしていつか、恋する心さえも失ってしまった。理由は簡単。ネットワークと神経学の発達は、個人と他人の境界をなくした。私と貴方は同じ生き物になつてしまった』
それはそうかもしれませんが。今の時代、インターネットで他人の人格や感情をインストールしたり、SNSで人生のログを共有するのだって珍しいことでは無いのだから。

他人に恋する必要なんてない。だって他人と自分に変わりはないもの。

『知っている？ 君は。太古、生物は、美しい物を見て■■■■（人類には行えない行動？ 翻訳出来ない）したそうだ。生まれてきた子供に初めて指を握られた時や、雄大な自然に心を奪われた時、或いは少年時代に食べた祖母の料理を思い出した時、■■■■したそうです。それは、悲しみを表すための方法のハズなのに』

『ああ、人類もそうです。人類もそういう時、何故か涙を流したそうです』

ココチュ星人は、触手をカチカチカチとテンポ良く鳴らした。もしかしたら、笑っているのかもしれませんが。

（ちよつと可愛いかも？）

なんて思うのは、失礼かもですね。

『地球人。私もあなたも、沢山の美しいものを失い、代わりに、沢山の素晴らしいものを手に入れた。或いはそれが、子供から大人になるということなのかもしれない。私たちは、センス・オブ・ワンダーを失い、魔法の力を失い、代わりに「智慧」を手に入れた。可能性をね。誇るべきことだが、寂しいことだ。そう思いませんか？』

『ココチュ星人さんは、詩的なですね』

『私は異質です。あなたと同じ。仲間に言ったら、笑われます』

何だか、私は笑ってしまった。するとココチュ星人も、またカチカチとテンポ良く触手を叩いて音を出す。全く違う宇宙の生き物なのに、こんなに似てるものね。

『だから、あなた達が恋をしていると聞いて、私は酷く誇らしい気持ちになりました』

遠くから声がした。だいくんの声だった。彼は息を切らしながら、ぱたぱたとこちらに駆けてくる。手には燃料の入ったタンクを抱えていた。

私の事を見つけると、ぱーっと彼の顔色が華やいだ。ああ、嫌だな。きつと私もそうだったのでしょうか。少し離れていただけに、彼の顔を見たら、すぐに幸せになってしまう。

『世界のヴェールは暴かれた。——しかし、魔法は残されている』

ココチュ星人がカチカチと告げる。

「しいちゃん。はいこれ」

この胸の気持ちが、君と私の世界の魔法。

「ありがとうございます。ええと……これはどうやって召し上がるのかしら……？」

燃料をココチュ星人さんにどう渡すべきか考えていると、ココチュ星人の外郭がバキバキバキと開きました。中に収納されていた沢山の手が、流麗な手付きで燃料を受け取ると、外郭の中にタンクごと仕舞います。

『ありがとうございます！ 地球人。助かりました！』

『いえいえ。困ったときはお互い様ですわ？』

『お礼にこれをどうぞ』

ココチュ星人は、自分の殻の中から真つ赤な果物を差し出しました。

『これは……何ですか？』

『これはリングゴです』

「リングゴだそうです」

だいくんは、目をまん丸にしました。

「リングゴ？　これが？　こんなに真つ赤で、小さな果物が？」

『私はこれを受け取りに地球に来ました。地球では、とても意味のある果物だそうですね。16世紀ごろの、原種に近い物。品種は「ニュートンのリングゴ」。歴史的な価値があるため、大切に保存されていたのです。私達の種族はこれを消化出来ないのですが、とても綺麗です』

現代人が食べているリングゴは真つ黒で両手で抱えなければならないような物ですから、私達の見慣れたものとは全然違います。これが古い時代のリングゴ。変なの。

「つてかこれ、所謂、木に実つたリングゴつてことか？」

「ひ、ひええ……そんな高級品、初めて見ました」

だいくんと私は、ぐくりと生唾を飲んでリングゴを見つめました。……一体、売り払ったら幾らになるのかしら。不思議な感じ。私達にとってリングゴとはコンパウンダー^配_{合機}でペレットから合成するものであって、植物という感じは余りしないものですから。

『それでは、さようなら。地球人！　私たちは繋がっている！』

カチカチと触手を鳴らして、元気になったココチュ星人は去っていくのでした。私たちは、コロコロと転がりながら帰っていくココチュ星人をばーっと見送ります。

「しいちゃん、帰ったらこのリングゴ食ってみようぜ」

「え、ええ？　これ自然の奴ですよ。食べてもお腹壊さないかしら……」

「それで、食い終わったら種を植えてみよう」

「ふふ、お婆かですね。もうこの地球の環境じゃ、まともな植物は育ちません」

彼は少しだけ寂しげな表情を浮かべてから。

「わかんないだろ？ 何か生えてくるかもしれないぜ。生えてこないかもしれないけど、でも、少なくとも、ワクワクはするだろ？」

「くすくす」

「何で笑うんだ？」

「——ううん。別に。まるで魔法みたいだな、と思って」

私は、不思議そうになっている彼の手のひらをぎゅつと握る。

○

病院の面会時間が終わって、兎羽たちは病室を出ていった。真っ白な部屋に残されるのは俺——御堂大吾だけだ。病院は苦手だ。退屈だし、何より綺麗すぎて気が滅入る。

「あ、すいません」

考えていると、視界の隅を真っ白な髪が舞っていた。

「ん？ どしたの獅子乃ちゃん」

「忘れ物しちゃって。私の携帯……」

「お、まじで？」

獅子乃ちゃん、しっかりしてるけど割りとそっかしい所があるからな。そういう年相応の一面を見るたびに、俺はほっこりしてしまうのだ。

「獅子乃ちゃん。今日はありがとね」

スマホを探しながら、俺は呟く。

「何がですか？」

「お見舞いもそうだけど、兎羽との事、何気にフォローしてくれてるだろ」

「……」

「兎羽ってああいう性格だからさ。今、すげー気まずいと思うんだよな。俺と兎羽の2人つきりだったら、もつとぎくしゃくしてたかも。でも、シーハンとかリン連れてきてくれて。何気に俺たちの間に立ってくれて。助かった」

兎羽は獅子乃ちゃんが好きで好きでたまらないので、獅子乃ちゃんが居るだけで基本的にニコニコしているのだ。姉妹仲が良くて大変うれしい。

「そういう風に見えるんだ」

「え？」

「ううん。大吾さんって、本当にいい子だなと思って」

「い、いい子ってね」

「くすくす。ごめんなさい」

彼女は子猫のように小さく笑ってから。

「そうだ。りんご」

「なに？」

「りんご。大吾さんと、食べた気がしたの」

「前世の話？」

「そう。ちゃんとは覚えてないのだけれど。……さつき、何だか、懐かしかった」

言われてみれば、俺も何だかそんな気がするのだった。獅子乃ちゃんにリンゴの皮を剥いてもらっている時、酷く懐かしい気分になった。

「なんだつけ。たしかにそんな事あったな。ニュートンのリンゴとか、なんとか」

「誰か、友達に貰った気がするんですけどね。……うーん、どうだったかしら？」

獅子乃ちゃんがこくと首をかしげると、ふわふわの白い髪がこくりと揺れる。

「でもね、大吾さん。私、何よりその事で覚えてるのがね」

「うん」

「あのニュートンのリング……めえええちやめちや、不味かった気がするんです」

なんて呟いて、彼女はふつと笑った。

「でもね。酷い味だったけどね」

慈しむような遠い目をして、獅子乃ちゃんは窓の外を見た。美しい紅色の夕暮れが、彼女の真っ白の頬を僅かに染める。まるで絵画の中の少女が喋るように、彼女は告げた。

「すぐく……素敵な味がしたのよ」

「素敵な味？」

「うん。魔法みたいな、幸せの味」

羨ましいなと思った。俺はその味を思い出すことは出来るだろうか。

でも思い出したら、俺はきつとまたひび割れてしまうのだろう。とも思った。

「ねえ、獅子乃ちゃん」

彼女は、無表情の視線を俺に向ける。

「退院したらさ、バケツプリンでも作ろうぜ。絶対食えねえってぐらい沢山」

「どうしましたの？ 急に」

「それか、竹を切ってきて、流しそうめんしても良いね。兎羽と一緒に。いや、シャンハイ荘の連中を総出にしても良いな。社長とか、工藤さんも来るかな。フェイさんと、大叔母さまも呼んでもいいし」

「くす。フェイさんはともかく、大叔母さまを呼んだらお姉さまは逃げます」

でも楽しそうだ。だろ？ 下らない事して、ワイワイ騒いでさ。

「はい♪ 絶対、やりましょうね。大吾さん」

獅子乃ちゃんは目を細めて笑った。彼女が笑うと、俺はいつも動けなくなる。目が離せなくなる。舌が乾いて胸が痛む。——まるで、魔法に触れているような気持ちになる。

「でも、まずはきつちり足を直さないと。ですからね？」

俺は彼女にバレないように、自分の心臓を強く握った。

「……お世話になります」

「くすくす」

夕日は傾き、藍色が世界に忍び寄る。もうすぐ夜だ。暗闇の中で生き物は眠りに付き、花は呼吸し、リングは重力に惹かれて落ちるだろう。連続する時間の中で。当たり前のように。

奇跡のような日々が、続いていく。

『運命の人は、嫁の妹でした。2』BOOK☆WALKER限定書き下ろしショートストーリー

【購入特典】

『運命の人は、嫁の妹でした。2』

BOOK☆WALKER限定書き下ろしショートストーリー

2022年9月9日 発行

著者	逢縁奇演
発行所	株式会社KADOKAWA 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
制作	株式会社ブックウォーカー 〒102-0076 東京都千代田区五番町3-1 五番町グランドビル3F

©alencien 2022

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、流布したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

電撃文庫	https://dengekibunko.jp/
BOOK☆WALKER	https://bookwalker.jp/
株式会社KADOKAWA	https://www.kadokawa.co.jp/
